

サブアルタンは従属的な状況におかれた人びとを示すことばとして、現在では学術書やメディアのなかで広く使用されている。もともとは軍隊における下位の士官を指すための用語である。このことばが広まったきっかけは、一九八〇年代初め、ラナジット・グハをはじめとする南アジア近代史研究者たちが、サブアルタンの概念を掲げて歴史記述を再構築する試みを始めたことであつた。彼らは、イタリあのマルクス主義の政治思想家アントニオ・グラムシによるサブアルタン諸階級の歴史に関する議論に刺激を受け、従属的な状況におかれた人びとの意識や政治を明らかにすることを目指した。ここでいう従属には、階級、カースト、年齢、性別、職業その他、さまざまな性質のものが含まれる。これらの歴史家たちにとって、サブアルタンの概念は、階級やプロレタリアートといったことばではとらえられない支配・被支配関係をあらわすうえで有効であつた。彼らはそれまでの歴史記述がエリートの視点から描かれていたとして、サブアルタンの主体性や自律性を強調し、エリートの政治領域とは異なる彼らの政治領域に焦点を当てることで、「下からの」歴史記述を試みる。たとえばグハは、農民反乱の研究において、反乱を起こした人びとの宗教的なことばや行動、儀礼、噂などに着目しながら、彼ら固有の意識を描き出そうとした。

このような南アジア近代史における新しい歴史記述の試みには、批判の声も寄せられ、そのなかでサブアルタン研究の方

サブアルタン Subaltern

いさみ りほ 井坂 理穂 東京大学准教授

下からの
人間学の
キーワード

向性も変化していく。たとえば、実際にはエリートとの関係において流動的で曖昧さをもつ集団であるはずのサブアルタンが、ともすると固定化した実体として描かれることへの懸念や、サブアルタン内部の一体性を想定しているかのような記述への批判もあつた。さらに、「サブアルタンは語ることができるか」との根源的な問いも投げかけられた。この問題を提起したG・C・スピヴァクは、サブアルタンが無力化され沈黙させられてきたことを認識する必要性を示した。また、サブアルタンのなかでもいつそう影のなかに隠されている女性の存在への注意を促した。

一九八〇年代後半以降、サブアルタン研究にかかわる歴史家たちのあいだでは、サブアルタンの主体性や自律性を描くというよりも、むしろ彼らの声が支配的言説のなかでいかに抑圧され、隠されているかに関心が向けられるようになった。植民地期のエリートの国家・国民概念、宗教・カースト認識、ジェンダー観、歴史観などに関する言説分析が活発におこなわれ、サブアルタン研究はいまやエリートについての研究になつたとの批判も寄せられたほどである。ポストオリエンタリズム、ポスト植民地主義などの思想潮流と連関しながら、そこではヨーロッパ史を基準とした進化的歴史記述への批判なども提起されていく。こうした流れのなかで、サブアルタンの概念は、南アジアや歴史学という枠組みにとどまらず、さまざまな地域や学問分野の議論で用いられるようになる。